『真宗文化』第14号平成16年度2005年3月発行(真宗文化研究所)

第二六回光華講座

誓願の流れを汲みて

――近代生活と安心――

親鸞仏教センター所長
本多弘之

はじめに

皆さん、こんにちは。過分なご紹介をいただきまして恐縮しております。私にとりまして京都は、今から半世紀にもなろうかというほど前のことですが、丁度、親鸞聖人七〇〇回のご遠忌の年に、親鸞聖人のお教えをいただくご縁を初めて頂いた場所です。それが七五〇回忌があと数年でくるということですから、時間だけは半世紀近く親鸞聖人の教えを自分の信念にしたいものだと思いながらうろうろしてきたようなことでございます。

今もご紹介いただきましたけれど、東京という場所で、宗教の問題を何とか都市に生きている方々に語りかけたいという試みは、私が大谷大学をやめさせていただいて東京にまいりましたの

『真宗文化』第14号平成16年度2005年3月発行(真宗文化研究所)

が昭和五八年（一九八三年）、その翌年から市民向けの親鸞講座を担当することになりまして、毎月一回、本郷の東大仏教青年会の、講堂をお借りして、講話をさせていただいております。東京は首都ということもあり、経済、政治の中心でもありますから、日本全国から若い方が学校に学びにきて、就職も東京の周りに一流企業の本社が集中するという実情がございますから、そこに若い人たちがどんどん吸収されていく。その人たちが年をとっていく。首都圏は日本の全体が若い人たちをそこに送り出してつくっている町であると言ってもいいと思うんですね。それぞれ若い時代は希望に燃えて東京に出てきて、新しく人間関係をつくり、家族をつくり、新しい場所を求めて家を建て、命を終わっていくという場所ですから、長い伝統を持った京都のような町からは感覚的にわからないほど、ある意味で自由であり、そして別の言葉で言えば軽薄というか、伝統の根が切れたような状態で互いに付き合っていきますから「三代住まないと京都人じゃない」というような目が厳しく生きている京都からは考えられないほど、よく言えば開かれた町であります。けれども共通の文化、共通の価値概念というものが大変希薄になっている。したがって新しいものがどんどん生まれては消え、生まれては消えていく。人間が自分の一生をそこに生きていながら、一貫した、安心できる文化の背景とか、それを拠り所にしてずっと生きうるような自分の美的感覚とか、そういうものがどんどん壊されていく。それは大きな枠で言えば、この現代社会を牛耳っているグローバリズム、資本主義という大きなシステム、会社組織や、工業生産社会がつくりだしていく、ある意味で人間が自然の面から切り離され、人工の面へ投げ込まれていくような動き、人工的空間がどんどん大きくなり、しかも変質していく。そういう中でその

動きを先端的に引っ張ったり、それに乗って動いていくことができるつもりで、若い人たちは都市の生活を楽しんだり、都市での野望のために情熱をかけたりするわけですけれど、それがどうも、いろんな形で問題が出てきています。

家族が崩壊し、家族の倫理もなくなり、共同体も崩壊し、何か全部、孤立化していく。孤独になっていく。それはある意味で自由である。自分の選択したように生きたい、自分の生活を自由に生きたい。マンションに象徴されるような鍵をかけてしまえば自分の箱に閉じこもれる空間。隣の人間が何をしているか全然わからない。互いに独立独歩、しかし人間としての共同体のつながりを失った独立というものは、結局、我が儘というか、自由というか、そういう中で本当の人間を磨き上げたり、つくったりしていく作業、健康な人間社会をつくっていくという作業をどこかで失ってきている。そういう場所ですね。

本当に殺伐とした、よく毎日のように殺人事件が起こらないものだと思うほど、殺伐とした空間なのに、比較的にまだ世界の大きな町に比べれば大きな事件は起こらない。これが不思議なような気がします。確かにアメリカのニューヨークやロサンゼルスに比べれば武器が普及していないこともあるし、多民族がそれほど混じっていないこともありますけれど、文化状況としてはもっと事件が起こっても当然だと思うほどの人間的つながりの希薄さ、そういう状況があります。京都も五〇年近く前に来た頃とは様変わりで、ずいぶん大きな街にもなり、街らしい街にもなった。五〇年前、京都駅前に降り立った頃はチンチン電車が走ってましたから「待っとくれやっしゃ」と言えば待ってくれる、のんびりした、よき古都という雰囲気が残っていましたけど、現在

『真宗文化』第14号平成16年度2005年3月発行(真宗文化研究所)

は雰囲気は東京とほとんど変わらない。人間関係なんかほとんどなくなり、電車は発車してしまう。誰が乗っていようと互いに関心はない。似たようなことになってきていますね。大阪であろうと地方の都市であろうと、文化状況が浸食され、近代文明の生活が隅々にまでどんどん浸入している、広がっているわけです。

命―その不思議

近代文明は確かに人間に豊かさと自由、職業選択の自由とか居住選択の自由とか、相当の自由の幅を広げたし、日本にあってはかなり生活レベルも平等であり、かなり豊かであり、世界中からいろんなものを買ってきて生活の糧にすることができるという、大変恵まれた状況なんですけれども、そういう生活をしている人間個人の精神内容に、人と人とがともに親しく連帯していくという大事な共同感覚が失われ、共同体の中に包まれてあるという安心感が欠落している都市空間になっている。そういう中でどういう形で語りかけることができるか、そういう試みを細々と、これで二〇年、親鸞講座を続けているわけです。何をしているのかなと思いますけれども、何か宗教問題というのは、プロパガンダとかマスコミュニケーションという形では伝わらない。出会った人たち一人ひとりが生きた宗教感覚をぶつけあって、本当に信頼できるものを自分の中でいただいていくしかない。気の遠くなるような長い時間をかけて、信頼関係ができていく仕事が宗教の仕事だろうと思います。オウム真理教のように神秘的なものとか、薬を使うとか、強制的に洗脳するというように、人為的に時間を短縮して濃縮して詰め込むという方式をとることは不健

全であり、本当に人間自身が目を覚まして信頼していくという宗教の本来のあり方からは程遠い。ああいう宗教現象が起こってくるのも、ある意味で都市化している人間の殺伐とした空間があるからであり、それが不健康なものを生み出していってしまうのではないかと思われます。

この間、親鸞仏教センターでシンポジウムを試みました。積極的に応援してくださっている東大応用物理の教授であった国府田隆夫先生に主たる講演をお願いして、東大の印度哲学科の下田正弘先生に加勢していただいて、小さなシンポジウムを行いました。国府田先生は自然科学の立場から、今ある人間というものがどういう成り立ちであるのかを、一四〇億年の昔のビッグバンから始まって、科学が現に手に入れることができる情報を科学的操作によって計算して一四〇億年の昔に宇宙や世界がまだなかった時代、時間がなかった時代、計測的に天文学的なデータをコンピュータ処理していくと宇宙がどんどん広がっていくというわけですが、それを逆算していくと宇宙がどんどん小さくなっていく。宇宙が小さくなるというけど、外側はどうなっているかをすぐ考えたくなる。しかし外側はないんだそうです。全世界が小さくなる。それも、我々の頭では考えにくい。あらゆる物質が濃縮していくと、ものすごいエネルギーが濃縮しますから大変な高温になる。そこまでいって爆発して歴史が始まったんだと言われている。それがビッグバンだと。一四〇億年前に爆発したという説が出されて、それに反論を出す学者がいない。皆、そういうものだと思っているらしい。国府田先生も物理学者としてそれしか考えられない。そこから時間と空間が始まった。こういう考え方ですね。私はそういう計算の根拠とかデータの処理とかについては全く知りませんから、それについて疑いを出す余地はありませんが、大変キリスト教的

な考え方だなと思います。ある時点から突然世界が始まった。それまで世界はなかった。そこから始まって物質ができてきた。はじめは物質がない。電子がふわふわしていたのがくっついて固まりになって原子になり分子になって、分子がつながって一つの固まりをつくり、ある時、突然またそれがつながってということを推測するわけです。推測ですから誰も証明できないわけですが、証明に似たような実験をしてガラス管の中に物体をほうりこんで放電するとか電子がつながるという実験をして証明したことにしている。そういう中で宇宙ができ、天の川ができ、太陽系ができてきて、その中にたまたま地球が出てきた。

国府田先生のお話を聴いて、なるほどなと思いましたのは、地球というこの天体はたくさんある宇宙空間のものすごい数の星の中で大変珍しい星だと。それはなぜか。地球に似たような物質でできている星はたくさんあるが、水という物質、H_2O、水素と酸素が結合するという物質がある天体は木星とか金星も同じらしいですが、ところが太陽からの距離によって丁度、地球という天体は水が水蒸気でもない氷でもない状態が成り立つ温度である。〇度から一〇〇度の間の温度を地球上で持っている。これは不思議なことなんだ。類稀なことなんだと。太陽との距離が秒速三〇万キロの光が八分二〇秒でいく距離が、もう一分かかるだけ遠かったら、氷ばかりの世界。もう一分近かったら水蒸気ばかりの世界。そこには絶対に生命は誕生しないと。今、生命科学者も物理学者も天文学者も、どこから生命が始まっているかという研究をしていくと似たようなところにくるんだそうですが、ともかく水というものがあって、水の中に生命が誕生した。原子が結合してタンパク質がたまたまできて、代謝する機能を持つことができ、自分と同じものを再創

造する働きを持ち出した。こんなことが起こることは考えられないことだと思いますが、何としても起源を探究しようとする。その結果、人間になってきたというんですね。我々は何となく人間になってきたと思うんですが、人間になったという背景はわずか一四〇億年くらいのものなのかなと素朴に疑問を持ちますね。

仏教では「無量億劫」とか言いますから数えられない時間だと。一応天文学的には数えて一四〇億年という、一四〇億年という時間はたった八〇年、一〇〇年の時間からすれば大変な数字なんですけど、それでも有限な数字ですね。そういう数字を受けて命が生まれてきている。今ここにある命の背景は摩訶不思議というしかないような偶然性の中から生命が誕生し、生命の中にまたいろんな生命が生まれた。始めには植物ができたとされていますが、その中から動物が出てきた。これだってどうして出てきたかわからない。どうしてかということについては遺伝子が突然変異したというわけですが、どうしてこうなってきたかはわからない。キリスト教だと神様がつくったんだというと、ああそうですかと言うしかないほど不思議なわけです。

そういう背景を持って今ある命、命があることが自分があることですが、命は死ぬということがあるわけです。個体として生まれた限りは死ぬことがある。新しい命を再生産するという機能を持ったと同時に、自分自身は死んでいくという機能を持っている。同じものがずっと生きるということは原始的な生命のところにはあるんだそうですが、分化していくにつれて生まれたものは死んでいくという、これが生命界の必然性になっている。犬でも猫でも遺伝子的には人間とほとんど同じなんだそうですね。遺伝子の構造から言うと。らせん状の構造で一部分ちょっと違っ

て犬か猫になる。それも不思議な話ですね。犬から犬が生まれる、猫から猫が生まれる、人間から人間が生まれるのはあたりまえだと思っているけど、あたりまえじゃないんですね。ほんのちょっとした違いをきちっと見分けて同じような個体をつくりだす。これだって不思議な話ですよ、考えてみたら。どうしてそういうことができるのかということはわからない。けれど生まれ出されてきた存在は死んでいく存在である。そのことを人間は自分で意識する。死を意識する存在。動物だってある程度、死が近いことを感ずることはあるし、それを避けようとしていろんな行動をとるのでしょうが、そのことを前もって不安に思い、そのことに対してできるならば避けたいといろいろな行動をとる存在が人間である。それは人間に特有の意識である。そういう不安ということを持つ命になってきた。人間として生きることに不安がついてきた。どうして不安を感ずるのか。どうして意識が自分を感ずるのか。外を感覚する機能は動物であれば皆持っているわけです。生きるためには外との対応が絶対必要ですから、危険があったら逃げる。自分が食物をとるためには動いていく。闘いもする。しかし人間だけは自分というものを意識して自分を苦しみ、自分の命が終わることを不安に思う。

不安―科学を背景として

こういうことが科学者の目から見て不思議である。科学者としてはそういう人間自身を科学の対象にできるかどうか。科学者はあらゆるものを対象にして研究したり分析したりするわけですが、不安を持った人間という存在自身を対象にしうるかどうか。多分対象にしうるだろうと。物

理学者としてはそうおっしゃっていました。今の段階ではまだできないことが多い、いずれできるだろうとおっしゃっていました。科学文明は人間の命の歴史をも対象化し、生きている命自身を分析する知恵を持ち、それを知るための道具、器具、それを計算するコンピュータという技術を生み出し、それを駆使してあらゆるものを数値化したり計測できるものにしたり、それを応用したりして、近代文明になってきている。そういうことがもたらす不安感、近代の不安を国府田先生はおっしゃっていました。私も人間の命がどれくらいの歴史があるか。計測的に五〇万年、一〇〇万年と言いますが、地層の中に人間の痕跡が埋まっていることで推測するわけですが、それだって本当のことはわからない。人間が生まれて以来、意識というもの、自分を意識する能力が与えられ、歩んできた。ですから不安もあり、インドでお生まれになったお釈迦様、今から二五〇〇年前ですが、その時代であっても不安であった。生きることが死ぬことだという、そのことは苦であると。生きてある事実を苦悩であると。どこかで苦は自分にあっては都合の悪いことを嫌う心だと。死ぬことを嫌うわけですから。そのことは苦である。それは不安があることだと思うんですね。

人間として自分を知るという意識が出てくると同時に不安がでてきた。ここ数百年、いつから科学という技術が出てきたという説はいろいろありますが、大雑把にはガリレオの時代からと言いますが、近代に来たって、パスカルが科学の原理を発見するとか、そういうことが起こってきて、なぜそうなっているかを理性で把握する営みが始まった。それはキリスト教の歴史の中で、宗教に反発して出たと思う方もあるかもしれませんが、そうじゃないのだそうです。神の与えた

世界を人間として理解したい。神様がつくった世界を理解したいという要求が、結果的に聖書とは違う事実にぶつかってきた。つまり太陽が天空を動いていると聖書には書いてあるが、実は地球が動いている。そういう人間の理性によって合理的に説明ができる自然界の事実を見ていくと、神話的に書かれていた聖書の内容は疑わしいとなってくるから、結果的に科学と宗教、理性と信仰がぶつかるようになってきたんですが、もともとは反逆のためにやったわけではない。科学者は熱心な信仰を持っていた。クリスチャンにしろ、ユダヤ教徒にしろ、神様を信じていた。どうして仏教徒の中から科学が起こってこなかったのかという問いを国府田先生にぶつけましたら、たまたまだと。仏教徒だから科学はつくれないということはないと思う。たまたま歴史の事実としてそうなっただけじゃないかとおっしゃっていました。そのへんはわからないことですね。現実に熱心な仏教徒であって科学者である人はたくさんおられますからキリスト教徒でないと科学者になれないということはない。生み出した歴史は確かにキリスト教から生まれてきた。これは否定できない。

したがって近代の科学文明の世界はキリスト教が牛耳っている。はじめに近代工業を持って工具をつくり、船をつくり、武器弾薬を持って、未だ近代以前の生活をしている地域に押し込んでいって、それまで素朴に生きていた人たちを皆殺しにして領土をとっていく。植民地という動きが今のヨーロッパの文明国と言われる国々を中心にして世界中に発散していた。アフリカ、南米、北米、アジアへ。近代化ということはキリスト教文明から発した科学的なものが、世界を蹂躙して乗っ取っていく歴史だったという見方もできるわけです。日本は百何十年か前にそれに危うく

飲み込まれるところを何とか辛うじて、不思議な運命で立ち止まって、近代の文明へと変革して、追いつき、追い越せでやってきた。けれどもいつのまにか実態は、ほとんど向こうの文明の価値観、倫理観に飲み込まれてしまった。そういう状況の中で、今の日本人の精神が持っている不安感、こういうものはインド以来、連綿と続いてきた中国、日本の近代以前の命が感じていた不安感と重なる面もありましょうけど、必ずしも同じではない。

環境―空虚化する人間関係

「anjali」という雑誌に木村敏という京大の精神科医の先生に書いていただきました。木村先生は精神病も時代と非常に密接な関係があると仰しゃる。現在の鬱病という問題は一時代前に分裂病が流行った時代とは社会背景が異なる。現代の鬱病は現代の時代背景を映していて、精神病の質も変わってきていると。私は人間の構造として同じ病気が起こるのだろうと思っていましたが、病気も時代を映すのだそうです。今、現代病がありますね。狂牛病もそうですが、ウィルス病もそうです。現代ならではという病気があります。エイズもそうです。昔もあったかもしれないけれど、現代社会独自の病もずいぶんある。ガンは昔からあったかもしれないけど、死亡率第一位になるのは現代ですね。現代状況は病となっても現れる、精神にも現れる。そうなのかと思いましたね。そうしてみると、現代の不安感も、現代ならではの社会生活とのかかわりにおいて与えられる不安感、孤独感、社会基盤が動いていくことの不安感なのではないか。私が大谷大学をやめた二〇年前には、研究室にパソコンを持っている人はおろかワープロもほとんどなかった。

この二〇年でワープロからパソコンに代った。携帯ベルが流行り高価な自動車電話だったものが、携帯電話の普及にはずみがついて、ワーッと変わってきた。どんどん新しい器具になり、器具の開発の中で乗り遅れる感じがするからどんどん買わされる。それと関係ない人間はある意味で幸せですけど、私が四〇代後半くらいから動き始めた猛烈な動きに、私より若い人たちはついていかざるをえない。自分はコンピュータが嫌いだからやらないなどと言っていたら、会社で役に立たない。私より上の世代はそんなことを知らないですませた。定年退職して知らないでも済む。私たちの世代は境目なんですね。私の友だちは仕事上は使えないけど、子どもから送ってもらってやり始めたからEメールはあるよとか。定年退職した人の多くの男性が今、Eメールの虜になっているのだそうです。仕事ではできなかったけど面白いからやり始めている。情報交換になる。若い人は新しい器具、新しい方式にどんどん馴染んでいきますが、歳をとるとついていけませんから一番簡単なものについていく。

それにしても器具の氾濫と、それによって起こる情報交換の付き合いによる人間関係の変わりようはものすごく速くなっています。昔であれば生まれてそこで育って成人して死んでいく村落や町があって、親からいただいた価値観なり生活形態を大事にして家族をつくり、子どもも教育して自分は死んでいく。一世代違うと三〇年くらいで少しずつは変わるけれど、大体はつながっていた。ところがここへきて、都市形態になったことによって、皆、独立して一軒一部屋を持つ。独立して親と離れ、じいさん、ばあさんと別れて若い人が生活空間をつくることがあたりまえになった。都市だけでなく農村もそうです。農家は土地がありますから、若い人に家を継いで

もらいたいと思うと、土地の一角に別棟を建てる。そうでないと嫁さんが来ない。都市と言わず、農村と言わず、そういう価値観です。生活の基底が切り離され、いろんな意味でものすごく変革が激しい。そういうところを生きていると、自分の自己同一性、自分は自分としてこういうふうに生まれて育って、こういう価値を大切にしてという自己同一性、アイデンティティによって自分をある程度、不安があっても自分を保持できる時代とは違う、現代特有の不安があるのではないか。信頼できるものはない。離婚が増えている。互いに変わっていく中で、変わり方が違うと歯車が合わなくなる率が高いわけです。子どもとは断絶状態になり、孤立化していく。日本が近代文明で豊かになり、ほしいものが買えて居住空間を持つという、いい面が裏目に出て、人間の不安というものが強く増幅しているんじゃないか。都市生活者の一人として自分自身を含めて、現代の人間は不幸だなと、感ずることも多い。一時代前の人間より幸福だとは言えない。ある面については幸せになったという面があるかもしれない。戦争の世代からすれば戦闘機に乗って死ににいかないといけないということは今はないじゃないかとか。今はちょっと危ないですけどね。どうなるかわからない。一人ひとりしっかりと絶対に戦争は許さないと言わないと、権力はどんどん持っていってしまいますから。自分は関係ないと思っていると、いつのまにかそういう可能性はなきにしも非ずですが。

つい二、三日前、真言宗の仏教センターが催した文化講座に聴講生として参加しました。環境倫理学という、珍しい学問分野を初めて起こした先生の講演を聞かせていただきました。その先生は環境という形から現代の問題を見直して、このままでは人類滅亡ですから、それに歯止めを

かけるためにはどういう倫理を構築したらいいか。大事な問題はつながりだと。人間一人だったら何をするかわからない。一人で自由だと、マンションに下宿している学生は勝手にごみを出す。隣近所と挨拶するような隣人関係ができている人はそういうことを絶対にしない。周りを意識して自分の行為に自己規制をかける。自分一人が勝手にできるという生活は不健全だと。環境ということは、自然環境も含めて人間環境も、人間が環境ということに目を向ける時、自然がどう成り立っているか。自然を大切にすることから人間同士がもう一度連帯することが大事だとおっしゃっておられた。大事な提言だなと思ったんです。

宗教が連帯にとって大事な意味を持ちうるかどうかということを最初から問題にして、私達は親鸞仏教センターのことを考えていましたので、大変示唆を受けました。都会というところは共同体が崩壊していると言ってもいい。隣が何をしているか関心がない、関心を持ってちょっかいを出すと嫌われる。ほっとけと言われる。そうなってしまうと人間の生活が健全に営まれるはずがない。出身が違い、価値観が違い、好みが違う。互いに勝手により集ったものが町をつくるためには三代かかるわけです。子どもがないと連帯がつながらない。子どもがあると親同士がつながる。若いものが隣同士になると、よほどのことがないと他人同士ではつながらない。それが同じ被害にあったとか、阪神大震災のようなことがあると本来の命の連帯が回復することが起こる。人間の根源には動物としての本性もある、植物としての本性もある。連帯して生きるという、命自身が持っている本来の健康性はどこかにあるに相違ない。ところが合理性、科学文明で、自分の好きにやるのがいいんだという自由への志向が行き過ぎて、自由というより恣意性の意向が強

すぎる。それはある意味でありがたい。自分の好きに生きられる。大変いいようだけれど、それでは人間は不健康になる。これが面倒な話ですね。都市文明の魅力は自由が与えられるところにある。確かにそういう一面はある。一旦、都市に生活した人が地方に帰れるかどうか。なかなか帰れない。人間関係の煩らわしさ、厄介さ、面倒くささがあって嫌だと。都市文明のある意味での魅力と怖さがあるんですが、このままでは都市自身も崩壊する。現実にドーナツ化現象でアメリカのニューヨークと同じで、真ん中が仕事場になって住む空間は二〇キロ圏、三〇キロ圏と外側に広がって行って真ん中は夜間の人口がない。中央の空間は定住人口が少ないですね。特別空間である。その周りにたくさんの人がいたんですが、そこがビル街になってばかでかいビルができて、そこは昼間の空間。昼間働きに来て金を稼ぐ空間で生活空間は外に出ていく。京都でもそういう現象が起こっていると思いますが、都心部に人がいなくなる。都心部は夜はネズミの空間だと。猫のような大きなネズミが走り回っている。街自身が近代文明によって壊されていくという事実があるわけです。それはやむをえないんですが、為政者の考え方も変わってきて、それでは不健全だと。ビルを建てたら上の方は居住空間にしようということが改めて提言される。そうしないと街が壊れてします。街が街でなくなってしまうという危機感が出てきて、ようやく新しい試みが始まった。しばらくたってみないと結果はわかりませんけど。子どものいる人たちがそこに住もうとすると学校がないんです。若い人が外に出ていってしまったから、小学校や中学校に子どもがいない。戻ってきたら学校がない。しかし学校を建てるために金を使えないという矛盾がある。まちづくりをしてこなかった罰があたって、資本主義の経済社会でほっておいたもの

だから今、どうなるかというところまで来ているわけです。

連帯―信頼関係の再構築

そういう空間に向かって、我々が辛うじて言いうることは、不安が増幅している状況の中で、何か皆が問題を抱えている。その問題をどういうふうに表に出して、連帯をどう育てたらいいのか。そこに新宗教が打ち込んでいくとワーッとつながりができて人をくみ込んでいく。新新宗教はその次の時代。その前の時代の価値概念ではつながらない。この信仰を持ったら金が儲かります、病気が治りますという、この世的価値概念では若い人は魅力を感じない。超常現象、科学では説明できないけど、不思議なことがあるに相違ないという現象に引かれる、それが利用されてオウム真理教のようなものが出てきた。そういうことを要求する気分が若い人たちに強くあるということは今の都市生活の不安と、希薄な人間関係、そういうものの中で何かを求めているんですね。

親鸞聖人の教えというものが、教団という形をとって地方村落共同体にがっちり根を下ろした。地域に根をはったという意味での教団、これはどんどん崩壊していく。友人で、地方から出てきているお寺の住職がいるんですけど、地方のお寺では一人老人が死ぬと一戸、門徒が減ると。若い人は都会に出てしまった。地方には仕事がない。皆、都会に出る。残った老人が死ぬと門徒が減る。既成教団は滅びつつある。都会はどうか。都会はほったらかし。ほとんど出てくる人たちは仕事で精一杯で宗教のことにかかわりたくない。けれど不安は一杯ある。その不安をどういう

ふうに解決するかということがわからないというのが現状ですね。既成教団は何もできない。何かやっても嫌われる。うまくつながらない。真宗大谷派でも同朋会運動と称して東京でもやったんですけど、つながらない。皆、逃げてしまう。入った人はいるんですけど、その人たちがつくった共同体が三〇年たつと、そのまま老化して若い人たちがいない。その人たちが死んでいくと減っていって新しい動きが起こらない。そういうふうに全部切れてしまう。時間的につながらないという大問題がある。これは家庭の問題もあります。日本文化の危機をキリスト教の神父さん（浅見定雄先生）が言われていました。家庭が崩壊していることは文化の危機である。文化が伝わらない。文化は親から子に伝わったと考えるけど、実はそうじゃないんじゃないか。昔から、親は子どもにかかわることはできなかった。働く世代だから忙しい。農村でも商人でも忙しい。「子どもはじいさん、ばあさんが育てた。囲炉裏端でやっていることを見ながら子どもは育つ。孫は一世代上からの文化を受け継ぐという形で代々つながってきたのではないか」。こういうことをおっしゃっていまして、なるほどなと思いました。親と子は面倒なもので、親が自分の価値概念を伝えたいと思うけど、子どもはある時点から反発しますよね。うまくいかない。強制的に突っ込もうとすると出ていってしまう。だから三世代同居がなくなったことは日本文化の危機なんだと。なるほどな、と思ったんです。しかし今から三世代同居しようといっても誰もしない。自由志向が強い。自由こそ近代生活の価値だというのが近代教育でも教えることだし、男女を問わず、そうだと思ってやっていますから、自由が束縛される方向をとったら反動だと言って認められない。

『真宗文化』第14号平成16年度2005年3月発行(真宗文化研究所)

親鸞仏教センターを立ち上げた時、一つの強い願いとして、何とか親鸞という方のお心とお言葉を拠り所にして、全く絆が切れた互い同士の中に、柔らかくて根がつながるような深い信頼のある連帯がつくっていけないか。そのためには時間もかかるだろうし、むだと言われる努力がたくさん必要だろうけど、そういうことをつくっていかないと、今の都会では宗教は無意味だと。プロパガンダのような、ラジオ放送をやるとか新聞広告をやるとか、いくらやったって素通りするだけであって、ああ、いい話があったなというだけで、そのまま忘れてしまう。そうじゃなくて心の深みで互いに信頼できて、互いに頼りにできる人間関係、その上に深い宗教的自覚を持って連帯できることができるなら、どれだけ殺伐とした都会の生活であっても、きっと信頼される場所になっていくのではないかと、ほとんどできないような願いかもしれないけど、この小さな学事施設をスタートさせていただきました。

それはどこからくるか。法蔵願心は、十方衆生に呼びかける。親鸞聖人は「親鸞一人がためなり」とおっしゃった。つまり自分に本当に呼びかけているという、存在の深みからくる呼びかけを、互いにどこかで感じるはずである。そういう問題をどこかで持っているはずである。それに目覚めさせていただく。それに触れて、そこに深い信頼関係を取り戻せることを試みてみようと。環境のことをおっしゃった先生も、林業で成功している方が知り合いにあって東京近郊の森を持っている。今、伐り出している材木は良質なものである。だけどその材木を植えたのは曾祖父さんだと。顔を見たことがない先祖の財産が自分の糧になっている。自分という存在はもっともっと深い背景の恩恵を受けて今がある。一四〇億年の背景を受けて今がある。その今は今後、どれ

だけ地球が続き、人類が続くかわかりませんけど、今後の未来の命に対して責任がある。その連帯を忘れ、俺だけは自由だというのは大きな間違いだと。環境問題からそういうことをおっしゃった。

自由―因縁と本願

近代的自由はヨーロッパが生み出した概念ですが、近代的自由は『歎異抄』一三条と抵触しますよね。あの言葉が親鸞聖人の言葉かどうか、わからない。少なくとも唯円が聞きとどめて編集したものですからそのままかどうかわからない。けれども親鸞聖人が持っていた人間に対する深い信頼は、人間は悪人であるという、悪人であるという言葉は「思うままにならない存在である」ということですよね。自分が思うままに善をやっていける、自分が思うままに正義をやっていける、そういう存在じゃない。自分は善のつもりで正義のつもりでも、人に迷惑をかけたり、人を殺したり、人の命をとったりして生きているんだ。実は悪なんだ。悪を生きているのだという時、それは宿業のもよおす所以だと。背景の命のつながりの中から今現在が与えられているのであって、今の自分は自分の命が生きてきた背景、それは仏教的には流転輪廻のインド以来の生命観を背景にしていますが、それは無始時来の背景だと。これはそういう表現ですけど、科学的な説明をしようと思えば十分に説明できる意味を持っていますね。今があるのは今だけではない、今を生み出してくる無限の不可思議なる人間の背景がある。そういう背景によって今があるし、また今の結果を受けていく未来は、それぞれ背景をいただいて生きている。したがって「卯の毛、

羊の毛の先の塵ばかりもつくる罪の宿業に非ずと言うことなし」というのは、単なる運命論ではない。単なる運命論は突然、神様がドンと来て、自分の自由にならないことを勝手にしたという発想ですが、そういう無責任論的な運命論ではない。いくら自分の命を自分で生きようとしても、生きようとする意思自身の背景、意思が選ぶということを与える条件も、意思自身が動くのも、よくよく見れば根拠は自分という思いよりもっと深いんだ。

たとえば自分が今、腹が減ったから飯が食いたい。俺が食いたいと思うかもしれないけど、腹が減るという事実だって、身体が命を繰り返して命が生きるためにそういう情報を中から発信するわけですから、自分で思って発信するわけじゃない。頭が発信するわけじゃない。身体が感じて発信する。生活の歴史の中で発信する。人間の空腹感は生命の飢餓感と違うんだそうです。時間に左右される。生活習慣で、朝、何時かに朝食をとっていると、何時になると腹が減る。一二時に昼食をとることを習慣にしていると一二時になると腹が減る。時間を外して生活していたらその時間に腹が減るとは限らない。人間の生理現象は人間的なんです。人間のつくった技術空間の影響を受けて人間の意思が動く。そういうことを一つとっても自分の思いだと思っているけど、思いじゃないんです。思うようにさせられている。自分で好きにやろうという思いも、自分の思いが起こる背景が無限に遠いわけです。因縁がもよおしているわけです。

これは不思議な話です。条件の中で因縁が動くわけです。そういう存在である、自由というけど、自由と思うけど、自由を生み出してくる深い深い因縁の背景、それを「業因縁」と言う。業因縁の背景において自分がしてしまうんだと。そういう恐ろしいような自覚というものが親鸞聖

人にはありますね。そこに「本願他力」とは、自分の外からという悪い意味での「お他力信仰」の、外のものに依存するというものではない。親鸞にとっての信念は「本願力」ですから、「他力と言うは本願力なり」と定義しているわけで、「本願力」は本願と名付けられるような大きな作用、『大無量寿経』に本願として教えの言葉になってくる、その元は人類の根底に呼びかけて「目覚めよ」として働いているような深い命の願。これを曽我量深先生は「如来の祈り」という言葉を積極的にお使いになりましたが、祈りと言うと祈願とか祈禱と重なるものだから浄土真宗では祈りは嫌われるということがあって、「añjali」第1号に añjali の説明のところに祈りという言葉が入っているので、早速質問が来て「浄土真宗には祈りはないんじゃないか」と教義学的な関心の質問が来ましたけど、言葉というのは面倒なんですね。言葉には歴史があるし、教義学の解釈の歴史がありますから、厄介なんですけど、言葉になる元がある。本願という言葉があって、『大無量寿経』の言葉を言葉として定着させる元がある。それは人類平等に呼びかけている、十方衆生が手を取り合って生きられるような空間をつくりたいという深い願ですから、そういう願を「本願」という言葉で『大無量寿経』は翻訳している。

「弘誓」という言葉でも翻訳している。そういう言葉になっている意味にとらわれて、祈りとは違う。願と祈りは違うんだと。そういう定義があってもいいかもしれないけど、文化が変わると言葉の意味も変わりますよね。だから鈴木大拙先生は「本願」という言葉を英語に翻訳する時に大変苦労された。英語圏では全部キリスト教文化ですから言葉はすべてキリスト教につながる。聖書につながる。どんな言葉を使っても聖書の概念につながる。そこに仏教を表現できるか。言

葉というものは長い歴史の中で、ある意味を付与されて使われてきていますから、違う意味をそこに入れようとすると時間がかかる。そういう点で鈴木大拙先生の仕事がアメリカ人の中に本当に定着して仏教への理解が出てくるのはこれからだろうと思うんですね。浄土真宗は今まで努力不足でアメリカにはあまり入っておりません。圧倒的に禅が入っている。西本願寺の方が努力してやっていますけど、これは容易なことではないのですね。人間に対して絶対他者というものを立てた論理だったら、キリスト教の方がはるかに長い時間、他の宗教とぶつかり哲学とぶつかり、科学とぶつかってやってきていますから、二元論の論理だったら叶わない。阿弥陀如来は人間の外にいて偉い人だという考え方で阿弥陀如来を翻訳したら、キリスト教の神様より程度の悪い神様かという話になるわけです。程度の低いゴッドだとなってしまう。

自覚―本願

仏教は本来、二元論じゃなかった。仏教は本来、自覚だった。自分自身が本当に命をよく自覚して、とらわれを破り妄念を破って、閉鎖された自分の理性の眼を破って光を入れる。本当の知恵によって命を見直すということですが、その時に外の絶対者を立てる必要がない。にもかかわらず阿弥陀如来がなぜ立てられたか。これは仏教の歴史があるわけです。親鸞聖人がおっしゃるように妄念を破るといっても妄念の中から妄念を破る力はないわけです。妄念の中に潜在的に力があって、いずれ破るんだという、そのために努力するんだという考え方が自力仏教です。だけど、妄念を包んでいる闇が深い。その場合に闇自身が闇を破ろうとしても破れないという、痛み

と事実を見つめて、破る原点は闇を超えた光だと。光は一応図式的には外から来ると言うけれど、外からと言っても本願の光、第十二願の光明無量の本願の光を、発信する基地がどこかにあるか。太陽から出るとか、そういうものではない。仮に浄土を建立する。「仮に」というのは本願が一切衆生を包む空間を語りかけるために建立する。法蔵菩薩という、これも仮の名前です。「一如宝海より形を表して法蔵菩薩と名乗りたまい」というけど、法蔵菩薩という名前も教えとして仮に立てたものです。別に神様ではない。絶対者ではない。人間を救いたいという祈りを一人の主人公の名前で語りかける物語ですから。物語の主人公の名前であって、これが法蔵菩薩でなくてもよかったはずだけど、どういうわけか法蔵菩薩になった。ダルマーカラ・ボーディサットバ、翻訳して法蔵菩薩、法宝蔵菩薩ともいう。翻訳は違ってももとの意味は仏法の達磨が蔵に入っているという形、それは本願を表している。仏法が蔵に入っている。それを衆生に与えたい。そういう願を語りかける主体の名乗りが法蔵菩薩である。それが成就した名乗りが阿弥陀如来ですから、本願の因果の名乗りです。だから方便だというわけです。「方便法身」だと。うそという意味ではなく、人間を目覚ませるための無限な願が、衆生一切を包みたいという無限なる願が、自己を限定して衆生を救いたいという形にする、その時の仮の形です。それ以外に方法はない、一番いい方法を選び取ったという意味の仮の形です。

そういう教えの形が親鸞聖人の明らかにしようとした浄土真宗のストーリーですから、そういうことをちゃんと意味づけて本当は自分自身が自分に目覚めるという目覚めの論理を「本願他力」として明らかにする、そのことをしっかり自覚した上で英語に翻訳していかないと、単なる

二元論でやってしまうと、近代人も信用しない。つながりの切れた近代人にとって二元論はだめなんですね。ヨーロッパやアメリカでは神様が絶対的な力を未だに強く持っていますが。ずいぶんと世俗化（セキュラライズ）したとは言うものの、強く習俗化されてはいるというものの、大統領が宣誓する時は未だに聖書の上に手を置くとか、神様がいるんですよね。そういうことが説得力を持つ。

日本ほど世俗化した社会は、世界中にないんじゃないかと思うくらい人間中心主義になってしまった。そのことのだらし無さというものが、今出ているいろんな現象だと思うんですよ。人間はどこかで超越性を持っていないと堕落してしまう。自分の恣意性、自由にほっておいたら、人間はロクなことになりかねない。自分自身で自分を殺しかねないですから。ほっておいたら大事なものを潰してしまう。何が大事かを忘れてしまう。共同体の中で互いに「お前、それは間違っているんじゃないか」と言われることにおいて、共通の大切さが初めて身についてくるのであって、ほっておいたら小人閑居して不善をなすというけど、ろくなことをしないわけですよ。誰も見ていないと思うと。人間皆というといけないかもしれないけど、私は少なくともロクなことをしない。

そういう人間が、共同体を生きている。すると互いに人を意識する。これも不思議ですよね。動物はどこかで類を意識している。人間は共同体の中で人を意識する。これも人間にとって大きな不安を呼び起こす原因でもある。対人恐怖症とか病気さえ出てくる。離人症とか。人が怖い。大勢の人がいると怖い。人が怖いというのは人を意識する如くに自分が自分でないことをどこか

で知っていますから、そこの落差が怖い。そういう不安感がある。人間の不安感は自分が自分の命を不安に思うだけじゃない、共同体を生活していることの不安感、悪口を言われるんじゃないかとか、こんなことをしていたら相手がどう考えるかという不安感。自分一人だったら人間、大概平気なんです。ところが人から見られて後ろ指さされる不安感。不安感だけど、これは実は人間にとって大事なんです。それがなかったら人間は破廉恥です。お互いに誰が何といおうと俺はこれでやるといったら社会は成り立たない。けれどもそういう構造を生きている人間を根源的に見ているもの、それが超越的なもの。超越的なるものが単に外にあるというのは神様でしょうが、仏教の場合は自己自身です。十八願の願文と成就文についている抑止文。歯止めがついた十八願の意味について『浄土論注』で八願問答をしています。その講義を安田理深先生がされた時、聴いていた者がそれを整理して「仏に背く者」と名付けた。仏法に背く、反逆者、悪逆の凡夫という言葉もありますけど、反逆者の自覚という意味で、「仏に背く者」というテーマを立てた小さな本にした。先生はそのことについては黙っておられたんですが、本屋さんが、それを再版したいと先生のところに持っていった時、「許さない、絶対に許さない」「どうしてですか」。先生は本当は理由も言いたくなかったんでしょうが、「題が悪い」。そうおっしゃって「どうしたらいいんでしょうか」「出したくないから出すな」「何とか出させてください」。やりとりの結果、「それだったら『自己に背く者』とせよ」と。「自己に背く者」というテーマで再版されました。

人間は自分が自分に背いて生きている。私たちはそういう自覚がありませんけど、安田先生の概念では、エゴ的自己と、その中に潰されるようにしてじっと命を引き受けている本当の自己、

エゴとセルフ。「本来的自己」という言い方は、わかったようでわからない概念ですが、曽我先生の概念を使えば、法蔵菩薩、私となってくださった法蔵菩薩、俺が俺がという自我の意識がそれを忘れている。そういう構造で私たちは孤立化し、孤独感を「無明」として、救われない愚痴とともに生きていく。けれども底にある本来的自己、法蔵菩薩を本当に認識してくるなら、曽我先生が言われるのは「法蔵菩薩は我である。しかし我は法蔵菩薩ではない」。その場合、我の意味が変わるわけです。本当の自己、それは私が私と思っている私ではない。なぜそういうことを言うかというと、法蔵菩薩や如来が我々をお救いになるということは、単に外からくる他律性ではない。自己にとっての神のようなものではない。自分自身の本当のあり方に帰そうとする命の営み、命自身の本当のあり方、命自身も生老病死ですから、有限なる命であることは変わりがないのですが、別に法蔵菩薩をいただいたからといって長生きができるという意味ではない。ただ解放されて自己を信頼し、相手も信頼して生きられるような原点を『無量寿経』は法蔵菩薩の名で語り、本願として呼びかけた。

こういうものに触れますと自分の思いとか、自分の都合とかよりも、大事なものが自分にとっての情熱になる。これがありがたいところだと思うんですね。念仏生活、宗教生活というものは安田先生が「できるとか、できないという話じゃないんだ。自分がもうそれに降参してお任せするしかない、それが行けと言ったら行くんだ。それがやめておけと言ったらやめるんだ」と。親鸞聖人が『正信偈』の偈前の文で語っている『論註』からとった言葉、「動静己に非ず、出没必ず故あるが如し」。動くのも静まるのも自分ではない。己ではない。出るのも没するのも、世間

生活に埋没するのもそこから一歩出て宗教生活を生きるのも全部大きな働きのままですよと。その仕事を、今、させてもらうというのが「正信偈」の製作ですね。

終わりに

本願という言葉で教えられている大きな働き、全人類にかかっている働き、単に日本人だけではない。靖国は日本人の民族宗教ですよ。日本人の民族宗教にとっては正義でありえたかもしれないですが、それを神様として拝むことは他の民族を蹂躙してもいいことにすり変わっていきますから、靖国で死んでいった人が自分の親友だからと言って、私と喧嘩した人がいるんですけどね。それは戦前の論理に完全に巻き込まれて靖国に入ったかもしれないけど、本当は仏教者だったら行かないはずなんです。そこに入っているという虚偽の情報でしょう。入っているはずがない。仏教者だったら、そういう信頼があってしかるべきなんですね。浄土真宗の門徒の大臣が靖国に参拝するなんてとんでもないと思います。靖国の本質は戦争の神様です。自国民族正当化の支柱です。そういうことをちゃんとわかった上で参るべきです。靖国神社に行ったら戦争で傷ついた人が白衣を着て音楽を鳴らしたりしているんですけど、あれは戦前の大きな間違い、ヨーロッパやアメリカにくっついて植民地主義で国を立てようとした大きな間違いが叩きつぶされたわけですから、そこから立ち直って日本が世界に寄与するとすれば、世界が平等に互いに尊敬して生きられる原理を明らかにするしかないと思うんです。もう一回民族で立ったら、また潰される。これからの時代は文化の交流も多い。いよいよ大変な困難な時代に向かうわけですから、そうい

う時にこそ、本願の原理を世界に伝えて、少しも悔いのない大切な宝としたい私は信じています。こういうものを日本文化の基底に、日本人として生きる連体の根底に、もう一回、互いに信頼できる原点として回復していきたいものだなと、切に念じて、皆様にもぜひそれに参加していただきたいと念じているわけでございます。